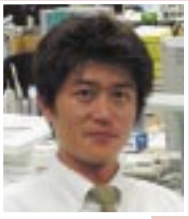
次のステージに向かって

巻・頭・言

特許庁技術懇話会　常任委員　　樫本　剛



3月に入り、今年度も残すところあとわずかとなってきました。今年度を振り返ると、知的財産推進計画の策定に代表されるように知的財産立国を目指した活発な動きがありましたが、このような情勢の下、会員のみなさまにとって今年度はどのような1年でしたでしょうか。日々の職務に専念しつつもその一方で常に何かを感じ、考えることの多い1年を過ごされたものと思われます。

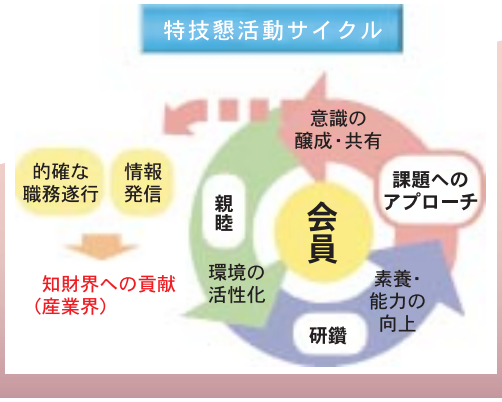
そして来年度には上記推進計画の保護分野で「任期付審査官の配置」「特許審査迅速化法の制定」等が予定されており、施策実行段階という次のステージへ移っていきます。そこへ向かう我々審査・審判官は、どのように考え、行動していくべきでしょうか ――

知的財産に対する世間からの注目度が依然として高揚し続ける潮流の中に、次のステージは存在しています。このステージでは将来最終的にどのような結果が待っているのか誰にも分かりませんが、良い結果となるのも悪い結果となるのも、このステージにおけるプレーヤー達のパフォーマンス次第です。なかでも審査・審判官は、果たす役割の大きなメインプレーヤーの一員と位置づけられますから、この注目度の高いステージにおいて、上記結果が「審査・審判官への世間からの評価」に与える影響は、これまでになく大きなものになるはずです。そうであるならば、次のステージでの好結果を目指し、メインプレーヤーである審査・審判官一人一人が関連する課題を自身のものとしてよりいっそう真剣に認識し、考えるべき時が今まさにきているといえましょう。

高い注目を好結果に結びつけた例として、サッカー界が挙げられます。Jリーグ発足をはじめ多彩なプランを実行してきたサッカー界では、プレーヤーのパフォーマンスが時には称賛を浴び、また批判を受けたりと、良くも悪くもいつも高く注目され刺激を受け続けてきたことで、現在ではワールドカップに出場できるレベルにまで飛躍を遂げました。知財界においても世界一の知財立国を目指し、将来を見据えた多彩かつ魅力的なプランを考え、実施していくことで、高く注目され続けることが必要です。

さて、身近なものから国際レベルのものまで多様かつ日々変動する課題について考えを及ぼすにあたり、多大な日常業務等もあり個人レベルでの課題把握・検討には限界があります。そこで関与は少しずつであっても議論する頭数が増えた方が、把握の効率性、議論の多様性等の点から有効であると考えられます。昨今反響を呼んだ養老孟司著『バカの壁』には「人生でぶつかる問題に、そもそも正解なんてない。とりあえずの答があるだけです。」とあります。そうであるなら、多様な『とりあえずの答え』を出しあい、より良い可能性を求めていく姿勢が大切といえましょう。まだ解が存在しない、もしくは解が不十分な状態にある課題が、あなただけのものではなくても（みんなのものであっても）、その解決に向けての糸口を引き出すことができる『とりあえずの答え』をもっているのは、“あなた”だけかもしれないのです。

また来年度から、例年採用職員と併せ、各方面で経験を積んだ任期付職員も加わり、多彩な人材がこれまで以上に増えることにより、議論の幅にいっそうの広がりも期待されます。さらに任期終了後には知的財産専門人材としての活躍も期待されており、その際に庁および各方面において知財立国に向けた意識の展開がよりいっそう図られることになれば、それは将来的にも課題に対する取り組みにおける有効な要素ともなり得ましょう。

そこで現有の、および将来的な課題の検討および解決にあたり重要な役割を果たしうるのは、特許庁技術懇話会（「特技懇」）がその目的に掲げている「会員相互の親睦および研鑽」ではないでしょうか。つまり親睦→研鑽→課題へのアプローチ→……と『特技懇活動サイクル』（下図）を会員が巡ることにより、職務環境および会員の素養・能力の相乗的向上や、議論の多様化・活性化等が見込まれ、ひいては知財界への貢献にまでつながります。

特技懇では、上記サイクルに関わる各種活動を提供することにより、会員が気軽に議論・検討できる体制づくりを目指していきます。会員のみなさまには、来年度から始まる次のステージに向け、特技懇活動へのより積極的な参加をよろしくお願いします。また特技懇活動についての意見、提案等もお待ちしています。